博士学位論文（東京外国語大学）

Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏　　名	スチンゴワ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲 318 号
学位授与の日付	2021.9.29
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	モンゴル人と自然の関係性 環境倫理学における自然評価論の視点から

Name	SIQINGAOWA
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 318
Date	2021.9.29
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	MONGOLS IN NATURE, MONGOLS WITH NATURE AND NATURE TO MONGOLS WITH SPECIAL PERSPECTIVE OF NATURE VALUATION

論文要旨

1970 年代ごろ、環境倫理学が確立され、中心的な議論は「自然の価値」あるいは「人間と自然の関係」1をめぐる議論である。最初、固有価値2と有用価値3をめぐり議論が行われていたが、最近では関係価値4が提言された。今まで環境倫理学の分野では、固有価値と有用価値をめぐる対峙関係と両者の切り分けを明らかにしようとした研究が中心となっている。それらには、自然中心主義か人間中心主義に限定され、人間と自然における理論の対立関係を浸透させたのである。その理論の対立関係により実践的効果が薄くなると著者は認識している。そのため、本論文では、従来、環境倫理学の基本である「人間と自然の関係」を再考し、自然と人間を対立的に捉えるのではなく、人間と自然の一体性を求める新しい理論の枠組みを提言することを試みる。人間と自然の関係性の多様性を考慮し、一つの民族の自然観に綿密な分析に耐えうる精度の高い理論を提唱する。本論文では、先行研究にて抱えている環境倫理学の固有、有用と関係価値に関わる理論限界を分析し、内モンゴルにおけるモンゴル人と自然との関係を通して、遊牧における人間と自然の関係はホリスティック固有、有用と関係価値の統合であることを主張する。すなわち、本論文では、遊牧、シャーマニズムにおける人間と自然が密接な関連性を生み、そのリンクには全体性、固有性、有用性と関係性の統合的なあり方が潜んでいることを論じる。また、近年、土地の有用価値を優先することにより遊牧と自然の関係が崩れ、自然の有用価値が優先されることにより発生する自然破壊と人々が自然から離反する現状を論じる。

研究設問

1)遊牧における人間と自然の関係性は環境倫理学の視点からどう捉えられるのか。固有価値あるいは関係価値で解釈可能でしょうか。もし不可能であれば、他の選択肢はあるのでしょうか。

2）現在、特に内モンゴルでは、遊牧民と自然の関係性には変化が生じている。長い間遊牧によって維持されてきた調和的な関係性が崩れている。経済発展に伴う現代化と伝統的環境思想の対立を環境倫理学の視点からどう解釈するべきか。

---

[1] 森岡正博、人間自然―「自然を守る」とは何を守ることか：「環境倫理学」(2009) に含まれている。

[2] 固有価値（Intrinsic Value）（本質的な価値とも言われている）は自然の存在が人間の判断と関係なくそのものに価値があると主張する。

[3] 有用価値（instrumental value）（道具的価値とも言われている）は自然が人間に利用されることこそに価値があると主張し、自然が市場経済の都合に合わせて値段化されることを示している。

[4] 関係価値（Relational Value）は多様な文化背景を持つ人々が各自大事にする自然がある、その自然は関係価値を持つと主張し、人間と自然の関係に焦点をあてる。

3）遊牧における人間と自然の関係性は現在の人間中心主義に偏っている自然評価における人間と自然の関係性を論じるにはどんな示唆が与えられるのか。

研究目的

本研究の主目的は、環境倫理学の固有、有用と関係価値に関わる理論の限界を内モンゴルにおけるモンゴル人と自然との関係を分析しながら指摘し、それを超越するための新しい理論を構築する。固有価値、関係価値と有用価値の概念、欠点と研究分野で現存している争点を明確化し、ホリスティック固有価値の評価システムの理論の共有を行う。

本論文においては内モンゴルを主なターゲットとしているが、遊牧における人間と自然の関係性を議論するには遊牧全体まで広げている。モンゴル人と自然の関係を解明するために、遊牧、シャーマニズムと土地使用権の私有化の進展など三つの要素を分析する。遊牧とシャーマニズムにおける人間と自然の関係性はホリスティック固有価値の評価に当てはまることを証明する。シャーマニズムには遊牧自然観の基礎となる神聖な信念がふくまれ、自然と人間の関係を宗教的に概念化していることを分析する。内モンゴル地域における土地使用権の私有化は有用価値の広がりを表現するモデルケースである。土地使用権の私有化により、遊牧経済が農業や工業に置き替えられ、市場経済の一部に組み込まれ、人間と自然の調和的な関係が崩れ、自然優先主義から人間中心主義に移行していく段階を証明していく。本論文では、遊牧における人間と自然の関係を提唱することによって遊牧式人間と自然関係を再構築することを目指しているのではなく、実際の人間と自然の関係性は人間が自然に依存している動的な関係性であり、自然を優先することにより人間と自然の共存を営む可能性を再考する理論基盤を与えたいことである。

1）環境倫理学をめぐって概念化された固有、有用と関係価値に関する研究をレビューし、新しい理論的枠組みとなる「ホリスティック固有価値」が形成される（第Ⅲ章）。

2）遊牧とシャーマニズムにおける人間と自然の関係性を分析し、遊牧における自然との関係性をホリスティック固有価値に照らし合わせながら、自然を優先する関係性を探求し、理解する（第ⅣとⅤ章）。

3）土地利用の分布に起因する有用価値の広がりにより遊牧民と自然との関係には変化が生じていることを理解し、自然を優先する環境思想と自然有用化の対立関係について解明する（第ⅥとⅦ章）。

4)最後に、自然を優先するレデイカルな人間と自然の関係性について提唱する。

研究方法

本研究では、新しい理論枠組みとなるホリスティック固有価値評価理論を構成する。理論的枠組みは、遊牧における人間と自然の関係を解明でき、遊牧における人間と自然関係性を一般化し、読者が正しく理解することを促すものである。さらに、新しい理論が形成され、多文化による環境倫理を解釈することを可能に、モンゴル社会の自然あるいは生態文脈を反映するだけでなく、共通の慣習を持っている遊牧コミュニティの存在を顕在化させる。

本研究では、環境倫理学、内モンゴルの環境問題と遊牧における研究を含む文献から収集された情報と二次データに経験的分析を加えた。西洋、中国、日本やモンゴルの研究者や学者によって作成された遊牧の移住、シャーマニズム、土地所有に関する研究を調べるために、解釈的及び記述的分析を使用した。文献の内容と二次調査データに関する記述的および解釈的分析は、客観的な調査結果に到達するための定性的調査アプローチである。情報とデータの一部には、筆者の主観的な経験を遊牧民の世界の理解から付け加えた。上記のアプローチで、遊牧民と自然の調和と健康的な関係性に関してより広範にわたる説明が可能となった。

研究意義

自然評価に関する理論は多くの学者によって遂行されたが、それらの評価理論を現実に存在する民族の環境思想を通しておこなった研究において本研究は優位性を有している。本論文では、現存の自然価値の評価アプローチの限界を分析し、新しい評価アプローチを試みたことは、遊牧における自然思想を説明する役割を果たし、モンゴル人と自然の関係を理解するより簡単な方法論となり得る。すなわち、本研究では、自然評価理論を既存の事例に採用し、それら各自の限界を分析し、統合性を見つけようとする研究である。

今までの遊牧研究は歴史学と人類学の立場として取られていることが多いのだが、環境倫理学の立場で行われている研究が白紙のままである。そのため、本研究は当該研究領域の空白を埋めることができるばかりではなく、遊牧問題を考える上で、現代的意義を持つと言える。

新たな枠組みを提示することにより、現地住民や先住民の自然との関係に関わる環境倫理学的な視座を提供することができた。自然と人間の関係を基礎とする環境倫理学を遊牧民と自然の関係のなかで検証することにより、環境倫理学は哲学的な議論としてだけでなく、実践的な学問として機能することである。

構造

第一章では、環境倫理学と遊牧研究についての文献を分析し、それらの理論ベースと研究現状について理解を深め、問題点を指摘する。

第二章では、論文全体の背景について概略を述べる。第一節では、モンゴルについての概観を理解してもらうため、汎モンゴルについての紹介をおこない、その後、内モンゴルの現状について述べる。人口増加による経済活動の多様化は遊牧生態系へ多大なる悪影響を与えている。内モンゴルにて、人間と自然の関係によって引き起こされている深刻な環境問題の背後には、自然価値への変化が反映されていることを結論とする。

第三章では、理論的枠組みを形成し、論文全体を結び付けることである。まず、既存の三つの自然評価システムを分析し、概念をまとめる。有用価値は自然の経済的な価値を中心とし、関係価値は人間と自然の関係性に中心を与え、固有価値は自然中心主義であることを提示し、自然評価システムとして機能するかの疑問点を整理する。最後に、ホリスティック固有価値についての考察をおこなう。ホリスティック固有価値は固有価値、有用価値、関係価値と自然全体性を主張する評価価値であり、自然を評価するための最も効果的なアプローチであると提言する。

第四章では、遊牧における自然と人間の関係について分析する。まず、遊牧と移動性について紹介する。次に遊牧生態系における人間と家畜、野生動物、植生との関係を取り上げる。最後に、遊牧は自然全体性を尊敬し、自然の固有価値を認識した上で、自然を利用するために自然を中心とした関係性を維持していることを説明する。

第五章では、シャーマニズムを介したモンゴル人と自然との関係性を解明する。第一節では、モンゴル地域におけるシャーマニズムの台頭について説明する。次の節では、シャーマニズムの自然崇拝の現象となる自然アニメーション、Ovoo セレモニーと Tengerism について説明する。第三節では、シャーマニズムは、自然の固有価値と全体性を尊重し、人と自然を精神的に結びつける関係が維持されていることを解釈する。

第六章では、土地使用権の私有化の導入により有用価値を進展させ、遊牧生活は終焉に向かっていることを証明する。最初の節では、土地使用権の私有化と行政区画の歴史的なプロセスについて説明する。次に、市場経済の影響で、土地、家畜、野生動物と植物などは市場生産物となり、有用価値が拡大したという問題を持ち込む。最後に、土地私有化を残された遊牧世界に広げることによる危険性を予想する。

第七章は、遊牧に潜んでいる自然中心的関係と現代化の対立を考察する。自然から社会へと移行する生活環境は遊牧生活における集団労働の伝統の消失を通して取り上げる。また、農業および産業社会に由来する人間中心主義となる人間と自然の関係は、現在、世界中で広く受

け入れられるという説論に対しても疑問視する。結論の部分では、人間中心主義となる現代社会と自然優先主義とする遊牧社会が対立していることを明確に提示する。

結論では、自然のホリスティック固有価値は遊牧自然価値を評価する適切なアプローチであることを主張し、多様な文化、地域あるいは原住民の自然評価に用いられることを正当化する。最後に、自然を優先すると自然と人間の関係性は人類の未来にとって福音をもたらすことであると主張し、論文の結びとしたい。

今後の研究課題と方向性

まず、本論文では、参考文献は英語とモンゴルを中心としたものであり、日本語と中国語の文献が不足している。次は、本論文で取り上げた遊牧、シャーマニズムと土地利用などは各自研究課題であり、もっと分析を深めることを今後の研究で取り組みたい。

次は、本研究は文献調査と二次データの考察を中心に試みた質的な研究になるため、これからの研究では現地調査やデータ収集による量的調査を加える必要がある。量的調査により現地の遊牧民は、自分と自然の関係をどう理解しているかを考察できる。また、ホリスティック固有価値を現実でもその存在を証明し、学術的に一般化することが可能になる。